

ゲーテの心眼 『イタリア紀行』について

森 若菜（クロスカルチャー2年）

ルネサンス絵画を本当の意味で味わえたら。18世紀ヴェネツィアの街という一大美術館を訪れた文人ゲーテは、

“ヴェネツィアは肉体の眼で見るとは不十分で、心の眼で見るとでなければわからない。”

と書き遺している。彼の『イタリア紀行』での美術論ではそのことの大切さを教えてくれる。自分の眼で見、自分の考えを自分の口で語ることで、そうしてつくられた文章は私たちの心を動かす。まるで実際に絵画の前にいるかのような臨場感を生み出す。私もゲーテのようにルネサンス美術を心ゆくまで堪能したい、と思った。そのためには、ゲーテのように一人の人間としてルネサンスの人々と向き合い、そこから得た考えを自分の言葉で表現することが必要である。書くという作業は自分の考えを自分が理解する為に有効な方法であるからだ。それによってルネサンス精神を会得できるだろう。



ゲーテはルネサンスの巨匠たちとの絵画を通じた会話の中で「再生」した。それは彼が「心眼」を手に入れたからだ。「心眼」とは「物事をはっきり見分ける鋭い心の働き」を表す言葉である。「眼の人」ゲーテがイタリアにおいて、その「眼」をどのように「心眼」へと変化させていったかを彼の『イタリア紀行』の美術観賞の記述から追い、美術を心の「眼」で見るというのはどういうことなのか、それを行うことによって私達は何を絵画から得られるのかを学びたいと思う。

ゲーテは絵画論を展開する前にこう告白する。

「正直に言うが、私は画家の技術や手腕に関してはほとんど何も理解していない。私の注意、私の考察は、実際的な部分、つまり絵画の対象と取り扱い方全般に向けられるだけである。」

このために彼の発する言葉は専門家で無い人々にも理解しやすい普遍性がある。

ゲーテの美術論を具体的に見ていくときに、特色として第一に挙げられるのは、ゲーテの光と色彩への関心の深さである。彼の文章を読めば見ているのが白黒のコピー絵であってもそれが色を帯びてくるように思えるから不思議である。中でもその傾向が良く現れていると思えるのは、ヴェロネーゼの『アレクサンドロス大王の前に出たダレイオスの家族』の記述である。ゲーテはこう批評している。「作品全体に流れる色調は与えずに、光と影を技巧豊かに配分し、部分的な色彩を慎重に交錯させて、この上なく素晴らしい調和を生み出そうとする彼の偉大な芸術がここではまさしく視覚化されている。」ティツィアーノに代表されるヴェネツィア派に独特の鮮やかな色彩を駆使したヴェロネーゼの絵にゲーテは魅了される。この文章にはゲーテがティツィアーノの絵の前に立って受けた色彩の美しさへの衝撃と感動とがよく表れているようだ。また彼は後の『色彩論』にこう書いている。

「北欧の陰鬱な空がどれほど色彩を駆逐していったかは、おそらく今後とも研究されるべきであろう。」

ドイツで灰色の空の下にいたゲーテにとって、イタリアの青空とはとても特別な魅力を持ったのだろう。また第二の特徴として、彼が絵画空間に一つのドラマを見ている点が挙げられる。レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩



餐』の評論にそれが見て取れる。彼はその絵に手のドラマを見る。『イタリア紀行』の「メモ帖」に「イタリア人の手の無言劇 / 絵画におけるその用い方 / 特に『最後の晩餐』」という文があるが、短いながらもこの絵の見所を鋭く突いている。人物一人一人の手の動きを細かく観察し、最後の食卓のドラマを紡いでいく。手の動きは様々な性格を示している。この絵では弟子たちが三人ずつ四つのグループに分けられている。ゲーテは一つ一つのグループについて手に注目しながら細かく観察し、またそれぞれのグループが関連し合っていることも認めている。彼の評論は、絵画が置かれた場所の考察から始まり、手のドラマの描写を経て、小道具の分析までに至る。この細かい観察眼によって示された文章を読むことによって、読者はいつしか「あなた方の中に私を裏切る人が一人いる！」から始まる、レオナルドの『最後の晩餐』の場面へと引き込まれていく。演劇人ゲーテにより、この絵のドラマが再現されたのだ。

第三の特徴として、絵画を全体の構図から捉えている点が挙げられる。特に二重構造を基本とする宗教画にゲーテは注目する。ラファエロの『キリストの変容』ではこう言っている。「両者は一つである。下には悩める者、困窮したものが、上には効力のあるもの、助力を惜しまない者がいる。両者は互いに関連しながら、内的に影響し合っている。」と言い、二つの場面の「偉大な統一性」を語る。またティツィアーノの『ニッコロ・デイ・フラーリのマドンナ』の評論でもその傾向は見られる。ゲーテはこの絵を目にしたとき、「私が見たあらゆるものをこの絵はその光で覆ってしまう」と感嘆する。その感動は、聖者一人一人についての彼の生き活きとした紹介に如実に現れている。この絵では上方に聖母マリア、天使が描かれ、下方には何故か「時代もありさま異なる聖人たちが」、各々異なる方向を向いて配置されているのであるが、ゲーテは聖者たちの同席の理由をあえて深く探索するのではなく、私たちに探索する余地も残してくれている。

ゲーテは画面全体が語りかけているものに注意深く耳を傾ける。彼の美術論の特色からそれが理解できる。レオナルドやミケランジェロ、ティツィアーノなどルネサンスの巨匠たちによる作品の前に立ったとき、虚心に作品に向き合い、彼らの声を聞き、自分の頭で考え、得た思いを自分の言葉で伝えること。このことをゲーテは行っているためにその美術論での彼の言葉は私たちにも伝わり、感動を共有することができるのだろう。彼はその作業を通して「心眼」を得、「再生」したのだ。ルネサンスとはまさに、人間がこの「心眼」を再びわがものにしたということなのである。ゲーテの『イタリア紀行』での美術評論を通して、ルネサンスの精神が伝わってくる。他者に伝えたいという強烈な想いが含まれている作品と出会う旅の中でゲーテはルネサンスの精神を得たのだ。

*ゲーテ『イタリア紀行(上・中・下)』相良守峯訳、岩波文庫